

特 101

452

書叢ギカア

流源の明文新

(達和学洋本日)



始





編一十六第書叢ギカマ

文學士 魚澄 総五郎 著

# 新文明の源流

(日本洋學の發達)

大正  
3. 10. 3  
内交

特101  
452

### アカギ叢書發刊の辭

予往年將に中學を終へて、生涯を捧ぐべき職務を選定する必要に迫らるゝや、懊惱之を久うして遂に書籍出版業を得たり。即稍狂熱を有したる文筆の樂を棄て、直に一書肆の丁稚となつて初めて轅を握るや、爾來葱忙の間に既に六星霜を経たり。未だ何等の得る所無きを耻づと雖、當今所謂書籍界の狀勢を見、立志以來の「書籍によりて享受し得べきあらゆる幸福は、必ず之を一般に普及せしめ度し」との信念に至りては、年を経て益々固きを覺ゆ。是予が非才自ら顧みず大正三年元旦を期し、書籍出版業として微を此處に致すべく立ちたる所以也。

當今書籍出版業たる予の最も痛恨に堪えざるものあり。古今東西の科學、藝文にして、誠に珍重すべき内容を有し乍ら、吾國に於る普及の程度眞に微少を極めたるもの之なりとす。原因とすべきもの多々ありと雖、書籍の價高きに過

ぐる一也。内容難澁を極めたる一也。尅大なるが爲に繁忙の今日、止むを得ず  
閑却せざるを得ざるもの一也。先づ第一着手として今日アカギ叢書を刊行する  
に至りたるは、誠に此處に見る所あれば也。即アカギ叢書は各冊を全部金十錢  
にて提供す。外國語、古代語は、全部通俗にして度に適せる現代語に翻譯す。  
如何に尅大なる内容をも、妙味を失はざる限り、必ず袖珍百頁にコンデンスす。  
依つて以て従來専門家、篤學者のみの專賣に委したる宇宙の眞理、學術の寶庫  
の、高價、尅大、難澁の三大門戸を開放して、あらゆる人士の活用に供せんと  
す。未だ善美を盡さずと雖、予が事業の第一聲としては私に誇りとする所也。  
希くは大方の諸賢、幸ひに善導を賜へ。

大正三年三月

赤城正藏白

## 新文明の源流

(日本洋學の發達)

はしがき

第一章 切利支丹禁制

第二章 御禁書の解禁

第三章 青木昆陽の蘭學創始

第四章 前野良澤、杉田玄白の偉業

第五章 蘭學輸入の聲授者

平賀源内

三浦梅園、麻田剛立

林 子平、司馬江漢

第六章 蘭學の全盛

大槻立澤の事業

稻村三伯

山村才助、橋本宗吉

宇田川玄隨、宇田川玄眞

高橋景保

高島秋帆

第七章 蘭學の發達

佐藤信淵

物理學書開板の濫觴

西洋植物學書、及び化學書著述の嚆矢

生理學書著述の權輿

飯沼慾濟

伊藤圭介

緒方洪菴

第八章 幕末維新の新思想界

第九章 結語

附錄

一、蘭學者略系統

二、日本化したる外國語

# 新文明の源流

(日本洋學の發達)

文學士 魚澄總・五郎著

はしがき

茲に題して新文明と云ふは、歐洲文明を指すのである。蓋し歐洲文明とはいふも、其實は人類智識の必然の發達が、或る機會で偶然歐洲に鍾つたに過ぎない。もとより其受用は歐洲人の私すべきものでなくて、人類の共通すべきものである。

近頃我が日本が急に振興して來たのは、實は永い間の謙抑から發した、一種の自負心のない努力の結果に外ならないのである。元來日本は地理上から見ても海島に立國してゐて、古來自發の文化がない。其文化と云つて居るものも其

實皆假借で主として亞細亞大陸の文化を受けるゐるに過ぎなかつた。

而して大方外國から我が國に移殖せられた文化は、其初めは、朝廷や幕府で採用してこれを一般に勸誘奨励した。儒教でも佛教でもその通りで、朝廷の權威、貴族の勢力を待つて社會に普及した。即ち上よりして下に及ぼすといふので、其行はれ易いとは當然である。しかしながら歐洲文明が初めて日本に這入つた時には、全く其事情が反對であつた。初めは民間の識者の而も僅少のものが自ら奮つて之を攻究したので、幕府は啻に之を奨励せないのみでない、嚴に其講書を禁じて居つたので、後に其禁を緩めた時でも、此等の學者を善くは視ない、唯幕府が其必要にせまられて止むを得ず許したので、而も此の新學術が追々と有爲の學者に依つて、實際に應用せられ其利益が少くないのを見て、幕府も亦これを公然と許すやうにまでなつたのである。即ち下民間から上當事者を覺醒させたのであるから、この新學術が社會に普及するといふと迄には、中々容易でない。舊幕時代の間は其極めて徐々に廣まつたのもこの爲めである。

然し歐洲新科學の潮流が已に徳川幕府の初め頃から、我海岸に推しよせつゝあつたのであるから、如何に徳川幕府でもこれを堰き止めるとは出來ない、幕府保守の堤防は暫しは其功果もあつたが、次第に壞されつゝ、幕末になつて一たび決し、遂に歐洲諸邦の源流と通じて汎濫禦ぐべからざるの勢を以て舊事物を一新した。

元來歐洲新學術が我國に於て長足の進歩をしたのは所謂鎖國三百年の間に養成した國民智識の根基があつてこそ出來たのは勿論であるが、一方には已に徳川の中葉から歐洲新科學の一端は不撓なる新學研究者によつて、一部人士の間に傳播せられて、初めは涓々たる新科學の點滴も次第に集注せられつゝあつたので、明治維新の俊傑が何の顧慮する所もなく、新文明を應用するの決斷を、なさしめたのも、幕府時代の洋學者の智識に依つて啓發されて居つたからである。

即ち我國の新文化は、幕末維新の際より著しく、開發せられた様であるが、

實は諸先賢が百餘年以來苦辛經營して、歐洲文化の假借に勵めた結果である。魚を得て筌を忘るゝ様な事があつてはならないのである。此小著を公にした所以もこゝにあるのである。

## 第一章 切支丹禁制

足利幕府の末期から徳川氏幕府を開くに至る初め頃に掛けて、七八十年の間に種々な西洋人も來り、隨つて西洋の學術をも這入つた。けれども徳川氏の始祖家康は、耶穌教の傳播に依つて人心が乖離するので、秀吉以來の遺策を承継いで、斷然耶穌教即ち切支丹宗を禁ずるといふことになつた。これらの獻策は、林道春や金地院崇傳の如き人々の顧問となつて、行つた事であらうが、これのために室町幕府の末葉以來、兎角紛亂して居つた人々を思想上に於て統一したといふとは、秦の始皇が焚書抗儒の如く、時代を背景として論ずれば其功績の偉なるを認めねばならぬ。

三代將軍徳川家光のとき、寛永年間に至つて幕府は、切支丹禁制の意味を擴げて、耶穌教を禁ずるのみでない、外國との交通をも絶つといふことになつた。始め家康は交通までも絶つといふ考は元々なかつたのであらうが、島原の切支丹宗徒の叛亂等で刺戟されて、遂には所謂鎖國といふ事態に立至つたのである。世に御禁書と云つたのは、寛永七年に讀むことを禁ぜられた横文字の書物を云ふので、たゞに横文字の書物のみでなく漢譯にしたものをも禁止して、宗教以外の天文、數學、地理に關する書物すら禁ずるといふ嚴重なる有様である。それで西洋學術の日本に傳はるといふことは一時絶えて仕舞つたと云はねばならぬ。たゞ此頃の翻譯物で今に残つて居るのは、彼の伊曾保物語で、慶長と元和と寛永とのその版本が三種と、天文と外科醫に關した書が少しあるばかりである。

元來この鎖國政策はその行はれた時代より觀れば、無論良制といはねばならぬが、併し凡て物勢を得れば弊も亦從つて生ずといふ習に洩れないで、此良制



も却つて佛儒學者を極めて偏狭固陋なものとして仕舞つた。後に寛政の松平樂翁公の下に、柴野栗山や、岡田寒泉が建策して、「異學の禁」の令が出て、幕府の學問は同じ儒學の中にも朱子學でなければ講ずることが出来ないといふ陋態に陥つたのを見ても明かであらう。(この異學の禁の批判については大分議論のある所で辯解する人もあるが兎に角偏狭といはねばならぬ)。況んや洋學に至つては、洋事を語るさへはゞかるのであるから、當時の識者といへども耶蘇教と歐洲學術との區別を知らないで、一概にこれを嫌つたのである。

和蘭人はもとゞ、宗教の方面に意を注がないで、専ら商業に従つて居つたので、渡海御免といふ特例のもとに交通を許されて居た。で和蘭船が我が港に入港して來た時には、日本の役人が行つて取調べねばならぬ、随つて通譯する通詞とかいふものがあつた。この通詞でも日常の會話が出来るのみで、書物を讀むといふことは禁ぜられて居つた。

明治二年に刊行になつた杉田玄白の遺稿である「蘭學事始」の上卷に、次の

様に通詞の事を書いてある。

國初より前後西洋の事に就ては、しかゞの事ありて、總て嚴しく御禁制仰出されし事故渡海御免の阿蘭陀にても其通用の横行の文字讀み書きの事は、御禁止なるにより通詞の輩も只かた假名の書留等までにて、口づから記憶して通辯の御用も辨ぜしにて年月を経たり。左ありし事なれば、誰一人横行の文字習ひたしといふ人もなかりき。

と、新學術を否塞してゐる情勢を知ることが出來やう。しかし世界の大勢は急速に進轉して、日本が獨りこれに背く事を許さない。千古の識者新井白石は遂に西洋の學術の進んで居るのを認めるに立ち至つた。これは偶然の機會からであるが、寧ろ必然の結果と見るのが至當であらう。

寶永五年八月廿八日大隅國馭謨郡の海上屋久島の栗生村といふ所に、土人の見なれぬ一巨船が着いた。これはヨハン、バツチスタ、シドチといふ羅馬僧侶が日本宣教の爲め來たのである。村人はこれを長崎に送つた。長崎の奉行所では

阿蘭陀人を始めとし、長崎にある外國人などを召集め、この羅馬人を召しよせて尋問した。が更らに要領を得ない。のみならずシドチも江戸に行く事を望むので、遂に翌六年十一月これを江戸に送り城北小石川の切支丹屋敷に禁錮する事となつた。十二月になつて新井白石は、この羅馬人を取調ぶるといふ役目を蒙つて奉行所に召した。羅馬人シドチは多少日本語を知つて居つたから、白石も次第に會話をすることが出来るやうになつた。が正徳三年十月二十一日此の羅馬人も死んだ。

白石の様な卓越した學者が外國人と接したといふことは、我文化史上特筆すべき事であらう。この結果著はした「西洋記聞」や「采覽異言」といふ書物を見て、白石が西洋學を重じた事を知らるゝであらう。もとより其内容は極めて貧弱ではあるが、歐洲文化を認めた確固たる識見は、何としても洋學開祖の第一人と云はねばならぬ。

新井白石が洋學の開祖といふのは、白石が洋學の必要を認めたといふ點に於

てゝある。未だ新洋學の創始者といふことは出来ない、いはゞ白石は青木昆陽なる種子を蒔いて前野良澤、杉田玄白といふ人々がその萌芽として現はれたのである。

## 第二章 御禁書の解禁

洋書の講讀を禁じ、歐洲の新智識を排斥したのは、徳川家光である。家光が多くの史家によつて不世出の英主として稱賛せらるゝのは、所謂鎖國てふ、秦の始皇帝のそれに似たる統一政策を行つたからである。然し此政策に伴ふ弊害として智識上に於て、全然日本を閉鎖したることになつたのは、千古の遺憾で、家光の政策を虚威張の退嬰政策なりといはるゝのも又これが爲めである。

然し鎖國といふも、長崎にある蘭人の通商も絶滅するといふ迄には行かない。故に歐洲文明の微かな一道の光は、縷の如く絶えず這入つて來たので、外客に接して居る、長崎人中には、人物もあつて竊かに洋書を繙いたものもあつ

たであらう。「乾坤辨説」(全部四卷)の如きは、已に明暦二年に成つたもので、寛永年間葡萄牙國派遣耶蘇教會長が携へて來た天文學者を、井上基宗が歸化人澤野忠庵に命じて翻譯せしめたが、忠庵は和語に通じて居るも、國字を知らない、でローマ字でかゝれてあつたのである、これが明暦二年の冬に、西吉兵衛、向井玄松が和書し、更らに玄松が其説を考辨したのである。西洋學術を日本に紹介した最古のものといはねばならぬ。また西川如見の如きは白石が「西洋紀聞」を著はすより前二十年に既に「華夷通商考」を著はして居る。西洋學術に關しては、如見が長崎にありし事は忘るべからざるものであらう。一方通詞の輩の中にも假令表向き一切和蘭の書を讀まないとするも、口移しのものもあつて兎に角西洋科學の進歩、殊に醫術の漢方醫に優つてゐるのを認めて蘭醫の兼業をしてをるものも出來て來た。延寶五年に西吉兵衛が法眼に叙せられ、元祿四年に吉田自庵、栗崎道有、村上自伯、元祿九年には植川甫筑、正徳四年には林玄伯孰れも長崎より江戸に召されて醫官に任ぜられた。これも西洋學術を嚴

禁して居る幕府も之れを度外にして漢方醫を信ずることが出來なかつたからであらう。斯の様に歐洲學術は、一時絶えたとはいふものゝ細々ながら系統は存して居つたのである。

所が茲に英邁なる八代將軍徳川吉宗が出づるに至つて、洋書の禁を解くといふ事になつた。

全體吉宗が洋書の解禁を行つた動機の主ともいふべきものは二つある。一つは天文學即ち曆學より、一つは醫術よりである、將軍は常に農は立國の基であるといふ口にして居つた。随つてこれに密關せる曆學に心を注がれたのであらう。又數學にも趣味を有して旗本建部弘賢に數學を學んだ。將軍はかの元祿に澁川春海が蘊蓄を傾けて作つた貞享曆をも尙不完全なりと思ひ、建部弘賢に質問せらるゝ事もあつたが、遂に弘賢は江戸銀座の職人中根條右衛門玄圭といふものを推舉した。玄圭は漢譯の「曆算全書」を翻譯した人で、吉宗に律宗曆といふものを作つて上つた。此時に玄圭は、本邦の曆學を精緻にするには、洋書の禁

を寛にせられねばならぬ。さうでなくば、曆學に關する書を見ることが出来ないと建言した。一方吉宗は簡夫儀を作つて、吹上の庭に置き、又佐久間町の天文臺に天文機械を置くといふ有様で、西洋學術を参考とすべき必要に迫まれて遂に禁書の令を寛にすることゝなつた。これ實に享保五年の事で、我が文明史上特筆大書すべきことゝ云はねばならぬ。

やがて新譯曆象全書が建部弘賢、中根玄圭の兩人の手に完成したのは享保十八年の事であつた。

禁書の寛められた原因は、天文曆學の外に醫術に關聯して居る。元來將軍は武藝を好んで馬術に熱心である。随つて馬の療法即ち獸醫にも心を注いだのである。享保十年蘭人が江戸に下つた時、將軍は其中のケーツルといふ和蘭人が馬術に達するのを聞いて、これを旗本の士に學ばした。ついで西洋種の馬も江戸につれて來た。この時にケーツルに馬術上の事を尋ねた書は「和蘭馬書」として今尙存して居るものである。もとより解禁書の令は享保五年の事であるか

ら、これらの事はこの後の出來事であるが、西洋學術を傳ふる道筋として見なければならぬ。

昔秦の始皇帝は書を焚き、儒を坑にしたが、漢代に至りて古學が復興して、孔子の書も壁間より出て來たといはれて居る。我が三代將軍の所謂解禁書の令も、八代將軍出づるに及んで、青木昆陽、前野良澤の發憤となつて、死灰再び燃え、明治維新に至りて遂に燎原の勢ひなすに至つたのである。

### 第三章 青木昆陽の蘭學創始

始めて洋學を開き、其系統を傳へた第一人として、今日文明の基礎を成した人は、假令其學びたる所が僅かの蘭語であつても、先づ青木昆陽を擧げるのが順序であろう。昆陽は名を教書おつのり、通稱を文藏と云つた。江戸の中央日本橋の魚河岸の魚問屋の子で、元祿十一年孤々の聲をあげた。幼少の頃から、學問を好んで、京都に赴いて伊藤東涯の堀川塾で勉學し、特に實用經濟の學問を心がけ

た。後江戸に歸つて八丁堀に塾を開いて生徒を集めて居つたが、その生計は極めて貧しかつた。昆陽の住んで居つた八丁堀は、町與力加藤又左衛門枝直（國學者加茂眞淵の門人）の屋敷内であつたから、此の人に知られて、此の人から遂には時の町奉行大岡越前守忠相に推舉せらるゝ迄になつた。此時に差出したものが、有名な薩摩芋の培養法を考へた、「蕃諸考」である、すると町奉行はこれを將軍吉宗に出した。吉宗は元來殖産に心掛けられた人でもあり、早速試みるべしとの事で、薩州から薩摩芋を取寄せて、小石川の御薬園で培養をさせた。そして「蕃諸考」を官費で出版せらるゝといふことまでになつて、これから日本全國に始めて廣まるに至つたのである。江戸の人皆昆陽を指して「いも先生」と呼び、昆陽も亦之を以て得意として居つた様である。

昆陽が公然と蘭書を読むに至つた事情は大槻文彦博士が「日本文明の先驅者」なる著述の中に委曲をつくしてある。でこれより少しく拔萃することとする。

青木先生が公然と蘭書を読むことを命ぜられたのは偶然な事である。將軍が

或る日、和蘭の天文書を見られた。所が圖を見たばかりでも非常に精密なものである文章が讀めたら利することが多からうと言はれた。すると御側に居た者は青木文藏が、かねて讀んで見たいと申して居りましたと申上げた。それなら讀ませよと云はれて、蘭書を読むことを青木先生に命ぜられる事になつた。之れが寛保元年今から百七十二年以前の事でこの寛保元年は記憶すべき年である。其年青木先生の年は四十四であつた、寛永の御禁書から百年である。さうしてもう此時は青木先生は幕府の旗本に取立てられて、百五十俵程の祿を賜つて居つた。此頃長崎の和蘭人の頭で「カピタン」といふのが毎年一度づゝ江戸へ來て將軍に謁する。之れは公方様阿蘭人御覽と云つた。其時は長崎から通辭が附いて來る。で青木先生は其旅宿へ出掛けて行つて通辭を仲立にして和蘭人に和蘭語を初歩から段々と習つた。そして寛保二年和蘭に關した最初の著述を出して居る、即ち寛保元年に蘭書を読むことを命ぜられもう其翌年には著述がある、それは「和蘭貨幣考」といふのである、實に經濟

學者の眼はえらい、一番先きの著述が貨幣だ。横文字も書いてある。其中には和蘭の度量衡の事も載せてある。

この事情は「蘭學事始」にも大體出て居るが、更らに面白い事には、青木昆陽や野呂元丈が、將軍の命によりて蘭學を始めてから、數年目に書習ひたるものは、ゾン目。マーン 月。ステルレ 星。ヘーメル 天。アールト 地。メン ス 人。ダラーカ 龍。テキゲル 虎。プロイムボーム 梅。バムブース 竹。といふ位の名と二十五字のアルファベット位であつたと書いてある。

さて江戸に於ては斯く青木文藏等に蘭書を読むことを許されたのであつたが、其門戸たる長崎の状態は何うであつたか。長崎には和蘭の通詞西善三郎、吉雄幸作、木本榮之進など、云ふ人があつて、遂に昆陽に次の様な事情を陳ぶることになつた。

是まで通詞の家に一切の御用向取扱に、彼文字といふものを知らず、只暗記の詞のみを以て通辨し入組たる數多の御用を渴々に辨じて勤居ることは、

あまりに手薄き様なり。何卒我々計りも文字を習ひ彼國書を読むべきを御免許を蒙りなばいかに。左あらば以來は萬事につけ事情明白に分り、御用辨よるしかるべきなり、是迄の姿にては、彼國人に偽り欺るる事ありてもこれを糺明する便りもなき事なり。(蘭學事始)

昆陽もこれを聞いて道理なりとして其趣を具申した。元より學術獎勵に熱心な吉宗の事であればまたこれを許した。これより長崎の通辭も蘭書を読むの自由を得ることゝなつたので、また一つは青木昆陽の力に依つたのである。

青木昆陽の著述は、「和蘭文學略考」を始め「和蘭註譯」、「和蘭文譯」、「和蘭櫻木一角考」等が和蘭語に關したものである。大槻文彦博士の記述によると、これらの書物の中には、アルファベットから始めて綴り字、名詞、動詞、形容詞のやうなものが合せて七八百語書いてあつて冠詞、前置詞などの事とは少しもなく、和蘭語には助語多くて會得し難しなど、言つてるとの事である。

兎に角昆陽がいかに苦心して蘭學を學んだといふことは、其著述の上から見

ても窺はるゝのである。

#### 第四章 前野良澤及び杉田玄白の偉業

青木昆陽は、明和六年十月七十二歳を以て没した。前野良澤が青木昆陽の門に入つたのも其年のことで、危い所で蘭學の系統が絶えんとした時であつた。天昆陽の苦心を空うしないで、別に、一偉人を生むて其啓端の功を繼がしめたのであらう。

前野良澤は豊前中津藩の醫者で、其生れたのは享保七年、即ち御禁書の令が解かれてから三年目である。幼少の時に父を喪ひ、其伯父で淀侯の醫官であつた宮田全澤といふ人に養はれた。全澤は博學の人で良澤を教育する事も常人と異つて居た。常に教へて「人といふものは世に廢れるだらうと思ふ學問は、學び置て末々まで絶えない様にし、當時人のすてはてゝせない事をなして世の爲に、後に其事の残る様にするがいゝ」といつた。良澤もとより天倫の性を供えた事

であるから、この教を奉じて、何としても世の魁とならうと心掛けた事であつた。

或日の事、同中津藩の坂江鷗といふ人が、蘭書の斷片を良澤に見せて、これは讀めるものであらうかと言つた。良澤もとより讀む事が出來ない、が同じ人間の用ひて居る文字であれば、讀めぬ事はあるまいと、こゝに良澤は蘭學研究の志を立てたのである。始め其師とすべき人もなかつたが、不圖青木昆陽が此學を通じて居るのを聞き、遂に其門に入り、彼の「和蘭文字略考」の傳授を受けたのであつた。此時良澤は已に四十七歳になつて居つた。尙良澤は長崎に行つて研究もし、また字書を繕いて獨學をもした。

此時に若狭の小濱藩の醫者で杉田玄白（又は鷗齋といふ）と云ふのが江戸に在つた。西玄哲の弟子で蘭方の外科醫である、洋書の解禁を幸に藩主に請ふて、和蘭の外科書「ターフル、アナトミア」を購つたが讀むことが出來ない、唯其の挿圖を見て大概を推測するのみであつた。玄白は良澤よりも十歳程若く良澤

には常に兄事して居つた。これは、兩人が毎年和蘭の「カピタン」が江戸へ來ると其旅宿の本石町三丁目の長崎屋源右衛門方へ出掛けて行つて始終落合つて懇意の間柄となつてを つたのである。

やがて時は來た。明和八年三月四日といふに江戸小塚原に罪囚の解剖（當時腑分ふわといふ）があつた。此時に杉田玄白、前野良澤、中川淳庵等、相誘ふて、これを見に行つた。玄白も、良澤も、西洋の解剖書と實際とを合せて見たいといふ考へからであつた。此頃はこの腑分といふのは、穢多がするので、漢方醫が行つて恐るゝ遠くより見て歸るといふ馬鹿げた有様であつた。さて兩人は其解剖を見ると、胃の腑だの、肺の臓だの一々圖に當つて相違がない。三人共に驚嘆し、且つは喜んだ。こゝで萬難を排しても此原書「ターフル、アナトミア」を翻譯し、醫家の本分を盡さうと決心して、その翌日から直に未曾有の大事業に着手した。これ實に今を距る百四十四年前の事だ、我國の醫學界、否我が文明史上紀念すべき日といはねばならぬ。

これらの事情は尙詳しく述べたいが、杉田玄白が老年の後になつて感慨の餘りに著した「蘭學事始」の記事を抜いて置く方が、至當であらう。さすれば先賢に親炙するの感があり、且つは懶惰者の睡を覺さすよすがともなるであらう。讀者に於てもこれだけは是非共讀んで貰いたいのである。

此節不思議に、彼國解剖の書手に入りし事なれば、先其圖を實物に照し見たきと思ひしに實に此學開くべき時至りけるにや、此春其書の手に入りしは、不思議とも妙とも云んか、抑々頃は三月三日の夜と覺えたり。時の町奉行曲淵甲斐守殿の家士得能萬兵衛といふ男より、手紙もて知らせ越せしは、明日手醫師何某といへる者、千住骨ヶ原にて腑分いたせる由なり、御望あれば彼方へ罷り越れよかしと言文をこしたり。兼て同僚小杉玄適といふもの其以前京師の山脇東洋先生の門に遊び彼地に在りし時、先生の企にて觀臟の事ありしに、此男に従ひ行て親しく視たるに、古人諸説皆空言にて信じがたき事のみなり上古に九臟と稱せり、今五臟六腑の目を分ちたるは、後人の杜撰なり



なんなど云へる事の話もありし。其時東洋先生臆志といふ著書をも出し給ひたり。翁(玄白)其書をも見し上の事なれば、よき折あらば翁も自ら觀藏してよと思ひ居たりし、此和蘭解剖の書も始めて手に入りし事なれば、照し見て、何れか其實否を試むべしと喜び、一かたならぬ幸の時至れりと、彼處へ罷る心にて殊に飛揚ぜり。扱て斯る幸を得し事を、獨り見るべき事にあらず、朋友の内にも家業に厚き人々へは知らし遣はし、同じく視て事業の益には相互になしたきものと思ひ量りて、先同僚中川淳庵を初め、某誰と知らせ遣はせし中かに、良澤へも知らせ越したり。扱良澤は翁よりも齡十ばかりも長じ、我よりは老輩の事にてありし故、相識にこそあれ、常には往來も稀れに、交接うとかりしかど、醫事に志篤きは互に知り合たる中なれば、此一舉には漏すべき人にはあらず、先早く申通じたく思ひたれども、さしかゝりし事、且つ此夜も蘭人滯留の折なれば、彼客舎にありける故夜分になりぬ、俄に知らすべき便もなし、如何せんと思へしが臨時の思付にて先手紙調へ知れる人の

もとに立寄り、相謀りて本石町の木戸際に居たりし辻駕の者をやとひ、申遣せしは、明朝しかくの事あり、望あらば早天に淺草三谷町出口の茶屋まで御越しあるべし、翁も此處まで罷越し待合すべしと認め書捨にて歸れと持せ遣しけり。

其翌朝とく支度整ひ彼所に至りしに、良澤参り合ひ、其餘の朋友も皆參會し出迎へたり、時に良澤一つの蘭書を懐中より出し披き示して曰く、これはこれ「ターヘル、アナトミア」といふ和蘭解剖の書なり、先年長崎へ行きたりし時、求め得て歸り家藏せしものなりといふ、これを見れば翁が(玄白)此頃手に入りし蘭書と同書同版なり、是れ誠に奇遇なりとて互に手を打ちて感ぜり。扱良澤長崎遊學の中彼地にて習得聞置しとて其書をひらき、これはロングとて肺なり、これはハルトとて心なり、マীগといふは胃なり、ミルトといふは脾なりと指し教へたり、然れども漢書の圖には似るべくもあらざれば、誰も直に見ざる内は心中にいかにかと思ひしことにてありき。

これより各打連立て骨ヶ原の設け置し觀臟の場へ至れり、扱腑分の事は、穢多の虎松といへるもの、此事に功者のよしにて兼て約し置しよし、此日も其者に刀を下さすべしと定めたるに、その日其物俄に病氣のよしにて、其祖父なりといふ老屠、齡九十歳なりといへるもの代りとして出てたり、健なる老者なりき、彼奴は若きより腑分けは度々手につけ、數人を解たりと語りぬ、其日より前迄の腑分といへるは、穢多に任せ、彼が某所をさして肺なりと教へ、これは腎なりと切り分け示せり、夫を行き視し人々看過して歸り、我々は直に内景をも見究めしなどいひしまでの事にてありしとなり。固より臟腑に其名の書記してあるものならねば、屠者のさし示すを視て落着せしことにて、其頃までのならひなるよしなり。其日の彼老屠が彼れ此れのと指し示し、心肝膽胃の外に、其名なきものをもさして名は知らねども、已れ若きより數人を手につけ解きしに何れの腹内を見ても、此處にかやうのものあり、かしこに此物ありと示し見せたり。圖によりて考ふれば後に分明を得し動血脈の

二幹、又小腎などにてありたり。老屠又曰、只今まで腑分の度に其醫師方に品々をさし示したれとも誰一人某は何、此は何々なりと疑ひ候御方もなかりしといへり、良澤相具に携へ行し和蘭圖に照し合せ見しに、一としていさゝ違ふ事なき品々なり。古來醫經に説きたる所の肺の六葉、兩耳肝の左三葉、右四葉などいへる分ちもなく、腸胃の位置形狀も大に古説と異り、官醫岡田養仙老、藤本三泉老などは、其ころまで七八度も腑分し給ひし由なれども、此千古の説と違ひしゆゑ、毎度々々惑疑して不審開けず、其度々に異狀と見しものを寫し置れ、つらく思へば華夷人物違ありやなど、著述せられし書を見たる事もありしは、これが爲なるべし。扱其日の解剖事終り、とても此事に骨骸の形をも見るべしと、刑場に野ざらしになりし骨共拾ひとりて、かざく見しに舊説とは相違して只和蘭圖に差へる所なきに皆驚嘆せるのみなり。

西洋人と日本人の腹の中の構造が違ふ筈はない。兒戲に類する漢方醫の今迄の

所行を、この同志三人は定めて笑つたことであらう。さてこれより、良澤、玄白等醫界の飛將の苦戦奮闘は何うであつたか、如何に確固たる決心を以て、大膽にも「ターフル、アナトミア」の譯解に着手したか。その實翻譯を言出した玄白は未だその時一字も蘭文を讀むことが出來ないのであつた。玄白うたゝ回顧して記してゐる所は次の様である。

歸路は良澤、淳庵と翁と三人同行なり、途中にて語り合しは、扱々今日の實驗一々驚入、且これまで心付ざるは耻べき事なり。苟も醫の業を以て互に主君主君へ仕る身にして、其術の基本とすべき、吾人の形體の眞形をも知らず、今迄一日々々と其業を勤め來りしは、面目もなき次第なり、何とぞ此實驗にづき、大凡にも身體の眞理を辨へて醫をなさば、此業を以て天地間に身を立るの申譯もあるべしと、共々に嘆息せり、良澤もげに尤千萬同情の事なりと感じぬ、其時翁(玄白)申せしは、何とぞ此「ターヘル、アナトミア」の一部新たに翻譯せば、身體内外の事分明を得、今日療治の上大益あるべし、い

かにして、通詞等の手をからず、讀み分けたきものなりと語りしに、良澤曰く、予は年來蘭書讀み出し度の宿願あれど、これに志を同じうするの良友なし常々これを慨き思ふのみにて日を送れり、各々がた彌々これを欲し給はば、我前の年長崎へもゆき、蘭語も少々は記憶し居れり、それを種として共々よみ掛るべしやといひけるを聞、それはまづ喜ばしきことなり、同志に力を戮せ給らば、憤然として志を立て一精出し見申さんと答へたり。良澤これを聞き悦斜ならず然らば善はいそげどいへる俗説もあり、直に明日私宅へ會し給へかし、如何やうにも工夫あるべしと深く契約して其日は各々宿所々々へ別れ歸りたり。其翌日良澤が宅に集り前日の事語り合ひ、先づ「ターヘル、アナトミア」の書にうち向ひしに誠に艱難なき船の大海に來せしが如く、茫洋として寄べきなく、只あきれにあきれ居たる迄なり。されども良澤は兼てより此事を心に掛け長崎迄もゆき蘭語并びに章句語脈の間の事も少しは聞覚え聞ならひし人といひ、齡も翁などよりは十年の長たりし老輩なればこれを盟

主と定め先生とも仰ぐことゝしぬ。翁未だ二十五字さへ習はず、不意に思立ちし事なれば漸々に文字を覚え彼諸言をもならひしことなり。

斯くて、新學の虐遇者は、いかにして筆を執り始めたか、其努力は次の文字を見ればよく分るのである。

扱此書をよみ始るに、如何にして筆を立つべしと談じ合しに逆も始めより内象の事は知れがたかるべし。此書の最初に仰伏全象の圖あり、これは表部外象の事なり、其名所は皆知れる事なれば、其圖と説の符號を合せ考へることは取付やすかるべし。かたゞ先づこれより筆を取り初むべしと定めたり、即ち「解體新書形體名目篇」これなり、其ころはデのヘットの又アルス、ウエルケ等の助語の類も何れが何やら心に落付て辨へぬ事ゆゑ、少しづつは記憶せし語ありても、前後一向にわからぬ事ばかりなり。譬へば眉といふものは目の上に生じたる毛なりと有るやうなる一句、彷彿として長き日の春の一日には明らかめられず、日暮る迄考へ詰め、互ににらみ合て僅に一二寸の文章、一

行も解し得る事ならぬことにて有りしなり。又或る日鼻の所にて、フルヘツヘンドせしものなりとあるに至りしに、此語わからず、こは如何なる事なるべきと考へ合しに、いかにもせんやうなし、其頃「ウォールデンブック」(釋辭書)といふものもなし、ようやく長崎より長澤求め歸りし、簡略なる一小冊あるを見合たるに、フルヘツヘンドの譯註に、木の枝を斷ちたる迹、其迹フルヘツヘンドをなし又庭を掃除すれば其塵聚り、フルヘツヘンドすといふ様によみ出せり。これは如何なる意味なるべしと又例の如くこじつけ考ふ合ふに、辨へ兼たり、時に翁(玄白)思ふに、木の枝を斷りたる跡癒れば堆くなり、掃除して塵土あつまればこれもうづたかくなるなり。鼻は面中にありて、堆起せるものなればフルヘツヘンドは「堆」<sup>ウツカシ</sup>といふことなるべし、然れば此語は堆と譯しては如何といひければ、各これを聞て甚だ尤なり、「堆」と譯せば正當すべしと決定せり、其時のうれしさは何にたとへんかたもなく、連城の玉をも得し心地せり、如此事にて「堆」と譯語を定めり、其數も次第々々に

増しゆく事となり、良澤もすでに覺居し譯語書きをも増補しけるなり。其中にもジンネン、(精神)などいへる事出しに至つては、一向に思慮の及びがたき事も多かりし、これらは亦往々は可解時も出来ぬべし、先づ符號を付置べしとて丸の内に十文字を引きて記し置たり、其頃知らぬ事をば纏十文字と名けたり。毎度いろ／＼に申合せ考へ案じて、解すべからざる事あれば、其苦さの餘り、それもまたくつは十文字々々と申たりき。然れどもなすべき事はもとより人にあり、成るべきは天にありの喩の如くなるべしと如此思を勞し、精を研り、辛苦せしこと一ヶ月に六七會なり、其定日は怠りなくわけもなくして各相集り、會議して談合ひしに實に不味者は心とやらにて、凡そ一年餘も過しぬれば譯語も漸く増し、讀むに隨ひ、自然と彼國の事態も了解する様にて後々は其章句の疎き所は一日に十行も其餘も格別の苦勞なく解し得るやうになりたり。尤春毎參向の通詞どもへも聞糺し事もあり又其間には、解屍の事もあり、亦獸畜を解きて見合せし事も度々の事なりき。

斯くて良澤、玄白、淳菴の諸翁は、遭遇した幾多の困難にも打勝つて、蘭學の堅強に肉薄し、不屈不撓、時計の針の進むが様に、徐々に確實に次第に歩を進めた。されば都下の人々も傳へ聞いて社中に加はるものも次第に多くなつた。尤も初めからこの會合に出席した人々には、桂川甫周のやうな天性穎敏逸群の才を持つて居つた人もあつた。其後は石川玄常、嶺春泰、鳥山松圓、桐山正哲など、いふ人もあつた様であるが、中には退屈し精力盡きて去るものや、生計に逐はれる人々の中には已むを得ず中道で廢する人もあつた。

斯くて四年の歲月を閲て、此間草稿を更へる事が十一回程で、遂に解體新書翻譯の事業も大團圓を告げた、時は安永三年のこととて今を去ること百三十九年前、實に日本での翻譯書の最初のものとなつた。アベセから始めて、四年で醫書を翻譯して、世の耳目を驚かした、その英風、誠に百歳の下猶能く懦夫を起たしむるに足るであらう。

さて解體新書は丁數二十枚ばかりの書、五冊から成つてゐて、杉田玄白の名

で出版された、尤も其實は前野良澤が主としてやつと云つてよいのであるが、良澤が名分利益などに一つは極めて冷淡であつたから、名を出すことを斷つたのである。

初め解體新書の出版するに就ては、杉田玄白は非常に心配した、それは御禁書が解かれて洋書を読むことを許されたのは、青木文藏や、長崎の通辭ばかりで、未だ一般に此命令が出て居るのではないからである、この以前にも後藤梨春が和蘭國に關する諸事を書いた假名書の小冊子を著して開版した時例の二十五文字が彫つてあつたから絶版を命ぜられて、その版木までも壞たれしこともあつた。そこで玄白は同人の桂川甫周の父甫三法眼の手から、將軍や老中に、又従弟吉村辰碩の手から九條關白、近衛准后、同前公、及び廣橋家へも一部づつ献呈した。此時三家よりは目出度古歌を自ら染筆して賜はり、又東坊城家よりは七言絶句の詩を賦して賜はつたとの事である。

良澤、玄白等が初一念は遂に右の偉業を完成せしめて、實に我青史の上を、

永く飾ることゝなつた。

翻譯の未だ上木されない時の事であるが、奥州一の關に建部清菴といふ醫官があつた。この人杉田玄白が「解體新書」の翻譯の事業をしてをるといふことを聞いて、これに疑問の書を送つたことがあつた。これに玄白が答へ旁々「解體新書」の「内約圖」を送つた、清菴は其返事に次の様な事を言うて玄白を賞稱して居る。

御大業(解體新書翻譯の事)近年に御成就可被成爲生民至祝仕候、老拙兼々解魔法師之屬を大息仕候處此御盛舉にて、正眞和蘭流の一家主、本尊有り、宗旨あり、先生は即開關唱導の大祖師也、宗旨なしの解魔法師の屬を逃れ、施治場中に横行獨歩可致事、老拙多年の志願相叶、不堪其喜雀躍仕候、是耳ならず内景之御詳説(解剖圖の事)に至りては、周季已來妄説の糟粕を食ひ、餘誕をなめ候唐流の迂遠なる術御一洗の上、和蘭之簡易緊要なる捷徑を導き賜はゞ、億兆之國々、億兆之生民、免天札、躋壽域申さん事、羅針に御比擬被成

候へども、三歳法師譯語の功計に無之、外科一家の祖師と申候者にも無之、眞に大慈大悲の佛菩薩と可申候、只所恨は老拙暮景虞淵に春き、當六十二歳、加之多病、御大業御成就迄存命難計、歌伏櫪碎唾計に御座候御隣察可被下候（下略）（和蘭醫事問答下）

此書の事は一方から見れば、已に地方に於ても、漢方の愚を覺つて居たものも少くないといふことにも思はれるのである。

さて前野良澤は享和三年に八十歳で、杉田玄白は文化十四年に八十五歳で没した、良澤の和蘭に關した著述は「和蘭文字略」、「蘭譯大成」、「和蘭譯笈」、「字學小成」など、云ふものである。

## 第五章 蘭學輸入の聲援者

### 平賀源内

青木昆陽や、良澤や玄白の苦學耐忍に依つて端を開かれた我が蘭學界に彗星

の如く現はるるものがあつた。平賀源内、三浦梅園、林子平の如き人々はそれである。

平賀源内は、讃州高松藩の人で、享保十四年に生れた。丁度御禁書の解禁があつてから九年目である。生得て敏才で、幼少の頃から本草學を好んで居つたが、二十四歳の時に郷國を去つて長崎に行き、新しき智識を求めた。後江戸に赴いて本草學者田村元雄の門人となり、寶曆九年には、自ら會主として、本郷湯島の藥品會といふ博物展覽會ともいふべきものを初めて開いた。此時著はした「物類品隲」は、久しく日本博物家に珍重せらるゝものである。

當時田村元雄が甲州から石棉の出るのを發見して、中川淳庵が蘭書に見ゆる石麻（支那にいふ）と同じものであるからと、火に堪える布を作つては何うかと源内に話した。そこで源内はこれを江戸火消しの裝束に作らうとした、尤もこれは失敗に終つたが、これに關して著はしたのが「火浣布圖説」である。

源内が致仕後の状態は全く製造工業に身をゆだねたので、陶器、砂糖、

氷砂糖の製造などに従った。また明和七年源内が四十二歳のときに、舶來の電氣機械を見てこれを模造したといふことは、有名な事である。

源内の學問は大體に於て博物學者であつて、その蘭學の智識といふのも僅かに字母を知つてゐるに過ぎない。しかし「蘭學事始」に源内を評して

儲毎々平賀源内などに出合し、時に語り合ひしは逐々見聞する所和蘭窮理の事共は驚入りし事ばかりなり。若し直に彼國の書を和解し見るならば、格別の利益を得ることは必せり、是まで其處に志を發する人のなきは、口惜しき事なり。

と言つて居る如く、彼が非常に明晰な首腦は、一廉の蘭學者よりも、新文明の輸入に功が大かつたのである。而も一方には淨瑠璃「神靈矢口渡」を作つて、風來山人として都鄙に雷名を轟かした彼も、彼が爛漫たる才華は、その才を負ふ慢心と、世を憤る不平とに依つて遂に狂疾となつて、獄裏の冤鬼となつたのは、誠に惜しむべき事である。

## 三浦梅園、麻田剛立

三浦梅園は、享保八年に豊後の醫者三浦徹山の家に生れた、丁度前野良澤に後る、事一歳である。徹山は梅園の祖父で算數に精しい人であつたから彼も其性質を繼いだのであらう。性來頭腦緻密で八九歳の頃から、事々物々に疑を抱いて居つたといはれて居る。彼の蘭學は歳五十六の時長崎に再遊して通詞吉雄幸作、松村安之丞等と交り、初めて學んだので其以前は蘭文には指を染めなかつたのである。

梅園の得意とする天學は、師とすべき人も無く、たゞ天倫の才と多少の書籍を參考としたのである。當時我國の天文學は、西川如見等の固く信じて居つた「天經或聞」を以て金科玉條として居つたのであつた。この「天經或聞」は天動地靜説であつたから、梅園は觀測實究の結果これに對して疑ひを發して、麻田剛立などに質問をしたこともあつた。(寛政十年長崎通詞志築忠雄の撰著した「曆象新書」は明かに日靜地動を取つて、古來天學家の説を破つたものであ



る。かくて斷乎として地動説を信ずる迄には行かなかつたにもせよ、其天文学は、よほど高尚の域に進んで居つたので、良澤、玄伯等が「解體新書」を翻譯するまでの間には「玄語」「贅語」の著述がある、これに「敢語」を加へて世に「梅園三語」と云つて居る。

梅園は寛政元年六十七歳で歿したが其の門人には有名なる帆足萬里が出て居る。

新なる天文学を關西第一の大都大阪の市中で唱へし人は麻田剛立である。剛立は、天学家綾部綱齋の二男で、享保十九年出雲の杵築に生れた。吉宗が佐久間町に天文臺を作つた時に彼は方に十一歳の童子であつた。長ずるに及び天文学を好んで、寶曆四年の曆に日蝕の記載がないのに、其前年に明年九月朔日に日蝕があるなど、云つて梅園などを驚かした事があつた。二十八歳の時に藩を脱れて、大阪に出て、熱心に天文学を討究し、寒暑を厭はず、觀測をした。非

凡の天才は遂に大成し、其名は遠近に聞ゆるやうになつた。

剛立は全く獨學で、蘭書にも依らず、自ら考案した窺天器などを作り、その學が、新輸入の西説に合ひ、梅園と共に地動説を信じたなど、實に驚くべき人物といはねばならぬ。解體新書の出版以來蘭學は醫學の方面に於ては、急速の進歩をしたとはいへ、範圍は極めて狹隘である。茲に剛立の如き人々のあらはれたといふことは、誠に新學界に取りて有力なる聲援者といはねばならぬ、而も其門下よりは高橋東岡、間大業などの二大天文家が出たのは欣喜に堪えぬ事である。

此學界の偉人剛立が没したのは、寛政十一年の事で歳六十六の時であつた。

林子平、司馬江漢

早く西洋の學術に着眼し、地理學、兵學より國防論を發して、有名なる「海國兵談」を著した林子平は、元文四年の生れて良澤の没年に先つこと方に十年である。

林子平は、純然たる江戸ツ子で、父源五兵衛は小納戸兼書物奉行をつとめて居つた、十九歳の時に兄に従つて仙臺へ赴いたが、尙頻りに江戸に往來した。三十七歳のとき初めて長崎に赴いて以來三度同地に遊び、蘭人より、世界の大事勢を聞き、遂に慨然國難を未然に救済する志を生じて、安永六年頃より愈々「海國兵談」「三國通覽」の稿を起した。

「海國兵談」は自ら千古獨見と自負するだけあつて、海國として日本の軍備論で「細かに思へば、江戸の日本橋より唐阿蘭陀まで境なしの水路なり」などいへる識見に至つては、無學なる、而も鎖國の夢に耽りたる當時の爲政者をして、如何に戰慄せしめた事であらう。

「三國通覽」は卑近なる地理書で「今新に本邦を中にして、朝鮮、琉球、蝦夷及び小笠原島を明かにすること小に微意あり、夫れ三國は壤を本邦に接して、實に隣境の國なり、蓋し本邦の人、貴賤となく文武となく知るべきものは、この三國の地理なり、是を諳んずるときは、治亂について迷はず、萬機施し易くして、

時有て力を陳ぶべく、時有つて知て樂むべし」と子平自ら言へるに依つて、其大體を知る事が出来るであらう。

一代の名宰相松平樂翁公が、子平の言議に従つて房、總、豆、相の海岸を巡視しながら、此著あるが故に、子平を禁錮にしたといふことは、甚だ不條理で前後撞着した遣口であるが、これも當時人心が兎角不安に感じた折なれば、彌縫的にでも國內人心を一時統一する必要に迫られた爲めであらう。

子平は蘭學者ではない、又事實蘭學を讀むことは出来なかつた様である、しかし早く西洋新學術に着眼したといふ事に於て、平賀源内等と同じく、新學者の聲援者で、また先驅者とも云ふことが出来やう。

日本洋畫の開祖司馬江漢は、江戸の人である、一體洋畫の日本に移はつたのは餘程古い事で葡萄牙と交通時代に耶蘇教徒の中にも洋畫をかいたものもあつたので、かの天草の亂のとき城中にあつたと云ふ軍旗には、西洋風の繪の立派

なるものがあつたと云ふことである。しかし日本最初の洋畫家として明かに認むべきは司馬江漢で敢てこゝに開祖といふ譯である。

初め江漢（初め春波樓と號した）は浮世繪師の鈴木春信に繪を學んで、自らも二世春信と云つて居つた。平賀源内の勧めで油畫を研究し、其技術にも充分達した。次いで和蘭語を研究して、和蘭畫帖なども見、遂に天明三年には日本最初の銅版を印行した、また或は東都八景を畫き、其畫風を廣めむためには諸神社に額面を奉納した。其畫に和蘭文字の入つてをるものもある。常々交つてゐる人々は、平賀源内、大槻玄澤、桂川市周の如き新學の泰斗で、彼もまた一個の新學者であつたのである。司馬江漢といふ名は芝に住んでゐたから司馬と云ひ、品川の入口だから江漢といつたとある、文政元年七十二を以て没した。以上の外新學の先驅者として尙舉ぐべき人もあるが到底この小冊子に盡すことが出来ないから、これより進んで蘭學の黄金時代を述べることにする。

## 第六章 蘭學の全盛

### 大槻玄澤の業

家語に「江は始め岷山より出づ其源は以てさかづき鴈うかりを濫すべし、其江津に至るに及で、船に棹さざれば渉るべからず」と云つて居る如く、始めの程覺末なかつた蘭學も、今や玄澤が出でるに及んで濼々たる谷川となり、遂には大海となるべき勢を呈した。

玄澤は一關侯の侍醫大槻茂藩の子で、文學博士大槻文彦氏及び如電居士の祖父にあたる人である。寶曆七年の生れて十三の頃から藩の醫官建部正菴の門に入つた。二十二歳のとき江戸へ出て、杉田玄白へ入門した。初め醫術を志して居たが、師玄白が蘭學者であるので、玄澤も又蘭學に志した。此邊の事情は大槻博士の「日本文明の先驅者」の中に次の様に書いてある。

玄澤も矢張蘭學を學びたいと言つたが、杉田先生は蘭學は一寸出来るもので

ない、それよりも先づ醫術をやつて置くが宜からうと言はれた。併し玄澤は杉田先生の塾生などに段々聞いて蘭學を學び、外の者が一年か二年かゝるものを三月か四月位で覺えるといふ有様で次第に力が進んだ。杉田先生もこれには驚いて「それならば蘭學をやるが宜い、併し私よりは前野先生がよろしい紹介してやる」といはれて其紹介で前野先生の處へ行つた、所が前野先生は世間の交りを絶つて居られたから、幾ら尋ねて行つても遇はない。十遍ばかりも門を叩いた揚句、前野先生も遂に其篤志に感じて面會を許し、覺えて居ることを残らず玄澤に授けられた。

かくて勉勵怠りなき玄澤は、未曾有の大著述「蘭學階梯」を出版することになつた、丁度天明八年の事で此邊の事は「蘭學事始」にも委曲を盡して書いてある。

前野良澤の蘭學は自分自身の研究のみで、世に發表しない、杉田玄白の翻譯は、醫學に關したもので而も日本語で書いてある。然るにこの「蘭學階梯」は

一般の蘭學に關係したもので、而も横文字を以て出版した最初のものである。文字の讀み綴り合せ、單語、會話、文法など横文字に振假名があり、譯がついて居る。蓋し蘭學階梯二卷は、方に新學が隆盛とならむとする階段で、最も重要視すべきものである。また著者の玄澤其人は語學者として當時最も進んだ人であつたのである。

此書が出版になるとき、例の「紅毛談」の如く、阿蘭陀文字が這入つてゐるために絶版になるかといふ恐れがあつた。然しこれも杞憂で、老中田沼玄蕃頭の好奇心に投じて居つたので、献上本の手段で絶版の患はなかつた。さて出版すると其影響は非常なもので、和蘭語は一時に一般に擴まるといふ有様となつた。隨つて西洋學が盛んとなり、西洋の風を慕ふものが多く、寛政六年即ち西曆の千七百九十四年の太陽曆の一月一日には、玄澤主唱者となつて、阿蘭陀正月といつて、盛大なる祝宴を開いた。これは甚だ意味のあることで漢學派即ち守舊派と蘭學派との衝突も端を此時に發したのである。

文化八年には幕府に蕃所和解御用と云ふものが設けられた。洋書を翻譯する所で、幕府が洋學に關する公の職掌を置いた始めて、玄澤は最初に擧げられて此役に任ぜられた。此頃はかの露西亞のレザノフが我漂民を乗せて長崎へ來た時で、玄澤は「還海異聞」を著はして國防を論じ、また露國の事情を一般に知らしむるために「北邊探事」を著した、此外其著述は二百餘部に達して居るので其精力絶倫驚くべきである。

玄澤は文政十年七十一歳を以て没した。

#### 稻村 三伯

良澤玄白に師事して蘭學の正統を傳たのは、大槻玄澤である。随つて其門人も多く、因州鳥取の稻村三伯、常陸土浦の藩士山村才助、作州津山の宇田川玄眞、攝津大阪の橋本宗吉などは其内の俊才ともいふべき人である。

稻村三伯は鳥取の藩醫で、玄澤の蘭學階梯を見て志を起した最初の一人である。大槻の門に入つて新學を研究すること多年であつたが、常に研究者の便り

とすべき對譯辭書の備はらないのを慨嘆して居つた、丁度此時に和蘭人のハルマの作つた和蘭と佛蘭西の對譯辭書があつたので、三伯は其中の和蘭語を取つて譯をつけるといふ事業をはじめた。當時もとより蘭學者と稱すべき人も少く、僅かに、宇田川玄眞、宇田川玄眞、岡田甫説などの協力で、漸く寛政八年「東西韻會」といふ書名の下に、木製活字にて三十四部を印刷して同好の人に頒つた。これ實に日本に於ける對譯辭書の最初のものである。世にこれを「ハルマ和解」といつて居る、特に又「江戸ハルマ」と云ふのは、後年日本語に通じたる甲比丹ゾーフの長崎で和譯したのに對しての名稱である。蘭學階梯によりて一段容易になつた蘭學は、此の新著によりて更らに著しき進歩を爲した。

三伯は後年、近江の海上郡に住して海上隨鴨と姓を變じて、又京都にあつて蘭學塾を開いた、其門人の藤林泰輔は、八萬語ある「ハルマ和解」の中から三萬語を抜いて「譯鍵」といふ辭書を出版した。これ亦世に廣く行はれたものである。

## 山村才助、橋本宗吉

西川如見、新井白石に繼いで地理學の基を開いた功勞者は、山村才助(昌永)である。

常陸土浦の藩士で、白石の「采覽異言」を視て、世界の地理を討究せんことを志して玄澤の門に這入つた。時恰も、近藤重藏、間宮林宗などが北方探檢に出掛け、露國南下の勢を示し、國防論の喧しき時で、昌永の著はした「増譯采覽異言」は、幕府の嘉納する所となり、更らに幕府より「露西亞誌翻譯」の事をも委托された。然しこれは完成を見ずして病没した、尙「西洋雜記」「華夷一覽記」等の著述見るべきである。

橋本宗吉は、大阪にて傘の紋書きを職として居つたものである。幼にして秀俊の人で、學を好み、遂に蘭學者小石元俊、間大業の助けて學資を得て江戸に遊學した。著述も少くない、間大業や、山中蟠桃の天文學は宗吉の力に依つて

大成されたものである。宗吉は後大阪に歸つて關西に於ける蘭學の基礎を作つた。

## 宇田川玄髓、宇田川玄眞

解體新書の翻譯せらるゝ當時の蘭醫は、吉田流、西流、栗崎流、村山流、桂川流、カスバル流など、云つて孰れも外科ばかりで内科は皆無といつてもよかつた。されば「和蘭陀醫事問答」などには、蘭醫を嘲つて次の様な記事がある。

「阿蘭陀と雖も風寒暑熱産前産後婦人小兒の病なきことは有るまじ、悉く膏藥油藥の類ばかりにては療治ならぬことなり、然れば内科なくてはならぬ事なるに日本にて和蘭流と稱するものは、皆膏藥油賣の類ばかりにて腫物一通りの療治のみすること不審なり。長崎奉行へ隨いて行く槍持の八藏、挾箱の六助も一箇年彼地に居て歸れば外科になりて、八菴六齊など、名を附け、阿蘭陀眞傳など稱するは心得がたきことなり」

この漢方醫の嘲笑に對して、大鐵槌を下したが宇田川玄髓である。

玄髓は作州津山藩の官醫で、二十五歳で蘭學を初め、玄澤門下の異彩ある一人である。桂川市周は玄髓の才を愛して、ヨハンネス、デ、ゴルテルの内科書を與へて、その翻譯を進めた。「内科選要」十巻はこの結果あらはれたもので、刻苦十年を経て漸く完成したものである。西洋醫術の我國に傳來して二百年、蘭學創始後二十年始めて、この内科書を見ることになつたので、蓋し未曾有の大事業といはねばならぬ。

宇田川玄髓は子がなくて、其跡を安岡玄眞が繼いだ、これが宇田川第二世である。初め漢方醫學の「傷寒論」を註釋して、江戸に諸家を歴訪して批評を求めたが玄髓の所で西洋醫術の遙かに進んで居ることを話されて、感激し玄髓の周旋で玄澤の門に入つた。玄眞は一方漢學に達してゐるので翻譯の譯語など多く此人が定めた。「ハルマ和解」を校閲したのも玄眞である。其著述の中で「醫範提綱」など最も有名なものである。玄髓は寛政九年に、玄眞は天保五年に没した。

た。

#### 高橋景保の獄

十一代將軍徳川家齊の時は、所謂大御所時代で國內一般に華奢風流を事として居つた。此の際に、露西亞や英吉利の船が頻繁に沿海に出没したのだから、幕府當局者の掛念も一通りではなかつた。

恰も此時に幕府の天文方に高橋景保といふ人があつた。彼は天明四年の生れで、文化元年に父に繼いで天文方となつた人である。此時に大槻磐水や、宇田川榛齋などいふ蘭學者が、新たに置かれた天文臺の蘭書翻譯局に出仕して居つたので、景保はこれ等の人々に就いて蘭學を學んだ。

文政八年薩摩藩に英國船の事變があつた時、景保は遂に意見書を發布するに立ち至つた。即ち「彼は、異國船の頻りに我國に出現するのは、異國政府の派遣するものでなく、單に捕鯨船の漂流し來るのに過ぎない。これがため防備するの必要がない、一意攘夷の令を發せばよいのである」と云つたのである。何

分幕府では景保の如き人の建言であるから採用して、遂に文政の打拂令となつて現はれた。

文政九年の三月例に依つて、和蘭甲比丹の江戸参観があつた時、醫官シーボルトを伴れて来たが、景保は屢々これを訪ふて、次第に親睦となつて居たが、たまたま景保はシーボルトの携帯して居つた「ナポレオン傳」と「蘭領印度地圖」を見て垂涎禁ずることが出来ない。遂にこの二書を譲り受けるために、景保はシーボルトの請に委せて、國の嚴禁を犯して、伊能の地圖の寫さして與へた。

はからずも此事が洩れて、景保は幕府に詰問せられ、シーボルトは長崎で取調べられ景保から貰つた地圖を取上げられた。

此結果景保は死刑となり、其他遠島や追放や、改易となつた人が四十餘人もあつて、少なからず蘭學者の信用を落した。

## 高島秋帆の砲術

高橋景保の獄は、蘭學者に取つては、一打撃であつたが蘭學者は依然として進歩しつゝあつた。

此頃長崎の富豪高島四郎兵衛の子に高島秋帆といふ俊傑が生れた。秋帆の父四郎兵衛の父は砲術家阪本孫之進に就いて、萩野方の砲術を學んで蘊奥を極めた人で、鐵砲方として一廉の名聲もあつた。であるから、秋帆も幼い時から砲術中の人で、而も彼の天品は到底從來の砲術で満足しない、自ら進んで研鑽し、また和蘭の退職武官が甲比丹となつて来るものについて、西洋の兵學を學ぶこと五年に及んだ。

元來我國の火器は、天文十二年に種子ヶ島に鐵砲が傳はつてから、全國に擴まり織田信長なども使つて居た様であるが、其後日本に於ては何等改良も加へられずにあつた。されば秋帆はもはや兒戲に等しい様な古い砲術には不安心に堪へないで、長崎奉行に向つて、小銃の改良や、野砲、白砲、忽砲の購求を建議し、また銃隊編成や、大小砲實射演習の必要をも述べた。しかし奉行所はこ



の建言には少しも耳を傾けなかつたから、秋帆は、慷慨し奉行の許可を得て、莫大の私費をなげうつて多くの銃砲を和蘭に注文して購入した。

そこで秋帆は一方通詞の吉田忠次郎等に依囑して、西洋の兵書を翻譯せしめ、大いに門戸を開いて、新しい兵學砲術を一般に教授した。

これ實に、日本古來の兵學を顛覆したので、我が文化史上にも注目すべき事件であるが、其當時毀譽も從つて起つた。豆州韭山の代官江川太郎左衛門英龍などは、遙かに秋帆を稱賛して居つたのである。

幕府の名宰相阿部勢州は秋帆を呼んで「火技中興、洋兵の開祖」と云つて居るが、幕府は天保十二年渡邊華山等の災犯に遭つた時に、秋帆を破格の待遇を以て登用した。其門には江川英龍を初めとし、佐久間象山や、川路聖謨や、大槻磐溪の如き名家があつたので、西洋砲術は急速の勢を以て擴がつた。

後に秋帆は長崎の一奸吏のために讒せられて、弘化二年には死刑にまでせられやうとしたが、僅かに死を免がれて、武藏岡部落主安部虎之助へ永の御預りと

いふことになつた。

此事は誠に惜しむべきことであつたが、幸にして罪のなきことが分つて死をのがれたことは、新學術進歩の爲めには幸であつた。

## 第七章 蘭學の發達

佐藤 信淵

宇田川玄眞の門に俊才が極めて多い、坪井信道、箕作阮甫等其錚々たる人々である。然しこれらの人々より更らに巍然新學界に卓立するものがある、出羽國雄勝郡床舞村の人佐藤信淵即ち是の人である。

信淵の學は祖先傳來の農、工、鑛學と、西洋の天文、地理、理、化、博物の諸學と、これに平田篤胤の國學や、朱子流の儒學を加味したもので學識の博く、識見の高いこと古今獨歩といつてもよい。其著述も極めて多く、「佐藤氏家學大要」に其一部分は刊行されてある。信淵の經濟思想に就いては京都大學の河上

肇氏が其著「經濟學研究」の中に詳しく論ぜられて居る。

新學者として信淵の面白きは、其著「鎔造化育論」、「垂統秘録」、「宇内混同秘策」等である。いづれにも該博なる蘭學の智識が溢れてをる。

吾人は今一々、その著述の概要を論じたいが、此小著其紙數に於ても許さないで遺憾ながらこれに就ては、前記の「經濟學研究」と土屋元作氏著「新學の先驅」に譲りたいのである。

信淵は明和六年の生れで、嘉永三年江戸淺艸で没した、歳は八十二といふ高齡であつた。

#### 物理學書開版の濫觴

西洋新學術は先づ醫學、天文學、及び地理學に依つて、日本全國に廣まつた。新學術の東洋學術に優秀なる點は、尙理化學等の研究が緻密なる點である。されば當然の順序として此等新智識の入るべき筈であつた。果せるかな、青地林宗は文政十年に「氣海觀瀾」を著はした、これ實に物理學者翻譯の始めであつ

た。

林宗は江戸の人、松山侯の侍醫の子である。長じて蘭學を學んで、文政五年に擧げられて天文臺の翻譯方となつた。其著述も少くない。「氣海觀瀾廣義」は、川本幸民が敷衍したもので、もと／＼原著述が、餘りに高尙すぎて、一般に了解し難かつたからである。天保三年水戸侯に聘せられたが、其年冬没した。

#### 西洋植物學書及び化學者著述の嚆矢

和蘭本草學は、蘭學創始期より既に我國に傳はつて、大槻磐水や、橋本宗吉既にこれが翻譯を行つて居る。又文政にはシーボルトの渡來と共に伊藤圭介なども泰西本草名錄を刊行した。然し未だ西洋植物學の全書といふものはなかつた。然るに天保四年に開版になつた「植物啓原」三卷は、實にこれが嚆矢である。この著者宇田川榕菴は、美濃大垣の藩醫江澤養樹の長子である。父は宇田川玄髓の門人で、榕菴もまた従つて蘭學を修めたのである。又其著「舍蜜開宗」は我國化學書の最初のものである。年四十九で弘化三年に没した。

生理學書著述の權輿

日本に於ける生理學書著述嚆矢となれる「醫原樞要」十二卷は、天保三年に開版なつたもので、彼の有名な高野長英の著はす所なり。才銳氣剛なる長英は學力又非凡にして、年二十七歳にして、江戸に出て、醫業を開き、蘭學を教授した。先輩宇田川玄眞、杉田立郷、坪井信道等と肩を並べて、盛んに名聲を馳したものである。其事蹟に至つては已に人口に膾炙してゐることである。

飯沼 慾齋

宇田川榕菴によりて、やゝ完全なる植物學書は出來たが、次いで安政二年の飯沼慾齋の「草木圖説」の著述は、植物學に一紀元を作つて、純然たる一科専門の日本植物學といふものを確立した。

慾齋は、伊勢龜山の人、幼少の時美濃大垣に赴いて居つた。たゞ植物學者小野蘭山が美濃に植物採集に來たので、その門に這入つて、本草學を修めたが、尙醫を本業として居つた。慾齋一日或人より、蘭方の優れるを聞き、奮然

決心して江戸に赴き、宇田川榛齋の門下となつた。後國に歸つて愈々植物學の研鑽を重ね、遂に不朽の名著「草木圖説」二十卷を著はす様になつた。蓋し日本新植物學界の元老といはねばならない人である。

伊 藤 圭 介

伊藤圭介は享和三年（前野良澤の没したる年）に、名古屋で生れた。飯沼慾齋の「草木圖説」が日本の植物學界に於いて貴重なるものには相違ないが、伊藤圭介が新植物學を日本に輸入し、且之を廣く後人に傳へた功績は何としても、動かすべからざるもので、蓋し新植物學界第一の大立物と云はねばならぬ。

文政九年の年に「シーボルト」が江戸に赴く時、途中熱田で待受けて、新智識を交換したといふことより見ても時已に圭介が植物學に造詣があつたと思はれる。翌年三月には名古屋に藥品會を開いた後、長崎に遊學してシーボルトの門に入つて専門に植物學を攻究する所があつた。次て天保元年に「泰西本草名疏」を譯出した。

其後圭介は名古屋で蘭方醫を開業して居つたが、文久元年になつて、幕府から蕃書調所物産學出版を命ぜられたが、二年の後致仕して、名古屋に歸つた。シーボルトと再び會したのも此頃の事である。

明治以後に於いての圭介の事業は述べるまでもない事であらう。

#### 緒方 洪 菴

坪井信道の門下より出た、緒方洪菴が、關西の重鎮として大阪に位置を占むるに至つたことは、蘭學普及に偉大なる功果を及ぼしたので、洪菴の事業は、何としても本書中から脱する事が出来ない。

洪菴はもと備中の生れで、幼少の時家は貧で學資を得るすべも無かつたが、奮然心を決して大阪に出て、或る蘭醫の下に食客となつて蘭學を研究した。四年の後、困窮の中を、衣を賣り、刀を賣りて漸く江戸に下り。坪井信道の門に入つた。稍々業を積んで後、長崎に遊び、更に蘭醫について對究した。天保九年大阪に出て、門戸を開いて醫を業とした。其門に入るもの千を踰え、門生の

中にまた人物を輩出した。かくて蘭學は方に極盛時代となつたのである。

洪菴の著「病學通論」三卷、「扶氏經驗遺訓」三十卷は、實に病理學書最初のものである、また嘉永には種痘法を輸入した功績も没すべからざるものである。

文久二年洪菴は江戸に召されて西洋醫學所頭取となつたが其翌年没した。今日大阪緒方病院は其繼承せられて居るものである。

### 第八章 幕末維新の新思想界

蘭學が方に極盛時代に入ると共に、已に業に蘭學の不要にして英學の必要を感じた人は、緒方の塾より出た福澤諭吉であつた。諭吉の生涯は、伊藤圭介、村上英俊等の人々と共に、封建の舊天地より明治の新世紀に跨り、而も後進を誘導した功勞は我が文明史上永久に没すべからざるものである。

今吾人は福澤諭吉を論ずる前に、幕末より明治初年にわたりて新學術界は大

體如何なる状態を示したかを略述することとする。

二度歐米を漫遊して歸國したる福澤諭吉は慶應の年に、芝に慶應義塾を開いた。其教ゆる所は變則の英學であつた。一時江戸が戦亂の巷となつた時、塾生は僅かに十七八人の事もあつた。

宇田川榕菴の門で松代の人（佐久間象山と時を同じうす）村上英俊は、佛學を以て明治元年達理堂を開いた。佛蘭西の民權主義を唱ふる人々は此塾から現はれた。また尺振八は統一學會を開いて正則英語を教へ其門人からは田口卯吉、島田三郎氏等が出た。中村敬宇の同人舎はまた英學を教へて居つた。明治五年に幕府は學制を頒布したのであるが尙塾の方が隆むであつた。

安政二年には幕府洋學所を九段下に置いて、翌年蕃書取調所と改め、箕作阮甫、杉田成卿、川本幸民を教授として蘭學を教へた。文久二年には一橋の護持院ヶ原に移して、三年開成所と改名し、林大學頭の監督を離れて、外國奉行の手に屬した。物産科、理科、化學科などいふものが置かれてあつた。開成學

校となつたのは明治元年の事である。明治七年に東京開成學校と改められて遂に十年東京醫學校を合併して大學となつた。東京醫學校は醫科大學の濫觴で、文久三年頃醫學所と云つて緒方洪菴を頭取として居つた。一方下谷伊賀藤堂の病院は合併せられて醫學校兼病院となり、大學東校と云つて佐藤尙中が頭取であつた。明治五年に第一大學區醫學校となり、七年東京醫學校と云つてをつたが、後に長崎の精得館を合併して本郷元富士町に移つて、明治十年になつて東京醫學校と開成學校は合併せられ、法理文科大學は一ツ橋に出来ることとなつた。東京帝國大學の出来たのは明治十四年の事である。

明治新時代を作るに効果の大なるものに、活版術の輸入と、新聞紙の發行とは見通すことの出来ないものである。

嘉永四年の頃、長崎の蘭學者木本昌造は蘭人に就いて初めて歐洲の活版術を學んで明治二年長崎に活版傳習所を設けて、自ら鉛字活字を製造した。この新活字の功用が、次第に世人の注目を惹いて、遂には政府の印刷局設置となり、

明治五年には已に太政官報告に活版を使ふ様になり、六年には築地活版所が設立せらるゝ事になつた。

活版術の發達と相應じて其進歩を促がしたるものは、新聞紙の發行である。

文久元年の十月初めて「バタビヤ新聞」が發行された。尤もこれは翻譯で半紙數板の木版に附したもので而も一號で終つた。次で元治元年三月には横濱から「新聞紙」の名で刊行するものがあつた、これは岸田吟香の經營である、更らに吟香は「藻鹽草」なるものを週刊した。此等は共に暫くにして廢刊になつた。

次で柳川春三の「中外新聞」、福地源一郎等の「江湖新聞」、辻新次氏等の「遠近新聞」、宣教師ベリーの「萬國新聞」やまた「六合新聞」、「内外新聞」なども出る様になつた。しかし何れも新聞といふよりも、寧ろ小雜誌である。明治元年には、新聞發行は太政官の許可を得べしといふ規定が定められたが、此年活版を用ひて始めて、「横濱毎日新聞」といふ日刊新聞が發行された。後に「東京横濱毎日新聞」となつた。記者は沼間守一氏や島田三郎氏や肥塚龍氏などであつた。福

地源一郎の「江湖新聞」は改名して「東京日々新聞」となり。明治五年には前島密氏の下に「郵便報知新聞」が出て、栗本鋤雲、藤田茂吉、犬養毅氏などが執筆した。また、成島柳北の下に「朝野新聞」發行せられ、次で原文ふり假名付の「讀賣新聞」の發行を見るやうに迄なつた。明治十年頃迄の新聞の發達は大體右の様で、追々と新文運に進みつゝあつたのである。

また雜誌の方では、明治六年米國から歸つた森有禮は學者の一團體を作つて時代を指導せねばならむとて、西村茂樹、津田眞道、中村正直、西周、加藤弘之、福澤諭吉、箕作秋坪、杉享二、箕作麟祥等と相謀つて明六社を組織した。尋いで各自の意見を發表する機關として、明六雜誌を發行して盛んに歐化主義を稱へた。而もかくの如く西洋文物のあらゆるものを輸入せんとした時代に、一世の木鐸となつて、國民の方向を誤らしめないで國民を導いた、尊き我が思想界の代表者は、何としても福澤諭吉を擧げねばならぬ。

諭吉は宇田川榛齋の歿した天保五年に大阪中之島奥平氏の藏屋敷に生れた。

父百助は帆足万里の門人で漢學に名ある人であつた。年二十の頃は、米國水師提督ペリーの渡來の事で、國內喧しい時であつたので、名を砲術修業に假つて、安政六年長崎に赴いて、蘭學の研鑽を積むだ。歳二十二の時に大阪に走りて、緒方洪菴の門に入つた。安政六年横濱開港の年に横濱見物をなし、始めて蘭文の實用に適せないことを悟り、道を變じて英國研究に志して、獨學を以て得る所があつた。時恰も幕府は軍艦成臨丸を米國に派遣する時なので、諭吉は木村攝津守の從僕となつて遂に米國に渡航するの機會を得た。翌々文久二年には、幕府また使節を歐洲に派遣することとなり、諭吉は再び、箕作秋坪、松木弘安等と共に翻譯方となつて隨行を命ぜらるゝこととなり、英佛獨露を巡廻して歸朝した。

斯くの如くして諭吉が得たる新智識は、著述となつて、極めて通俗に、卑近に國民に傳へらるゝことになつたのである。著述は全部「福澤全集」の下に集められてある。

諭吉最初の著述は「華英通語」てふ單語の辭書である。次で「西洋事情」を著した。當時苟も西洋通を以て任ずるものは、「西洋事情」を右左に置かないものはないと云ふ有様で、發行部数は偽版を合せば、二十五萬部位であらうとの事である。此の書は歐洲の政治組織や、其の一般事情を記したもので、今迄の洋學者がたゞ、物理、機械等に就いてのみ説を立て、居ると、全く其觀察點を異にしたものである。文章は簡潔で、而も要を得て西洋の狀勢を、略ぼ日本人に知らしめた功勞は、偉大なものといはねばならぬ。殊に直接税、間接税、郵便、爲替、政黨などの語の實際の意味は、國民の嘗て知らなかつた所であつたのである。

「雷銃操法」、「洋兵明鑑」、「議事院談」、「世界國盡」、等の著述も有名なものであるが、最も我が思想界に影響を與へたものは實に「學問のすゝめ」の著述である。

「學問のすゝめ」は、極めて短き小箴で、初編は明治五年に出て、九年十一月

第十一篇を以て終つて居る。明治三十一年刊行の福澤全集に依れば、發行部數三百四十萬冊として記して居る。我人口三千五百萬と見て、十人に一人の割合と云はねばならぬ。以て其感化を推察することが出来るであらう。

此の書の説く所は、開卷第一に、「天は人の上に上を作らず、人の下に下を作らず」といつて居る如く先づ四民平等を稱へて、中流社會（ミツツルカラツス）の勃興を促し、現代社會の缺點を述べて、各自獨立心の必要を説き、和漢の名分論を否定して居る。又その獨立論は交際社會を盛んにせよと言ひ、隨つて演説を盛んにせねばならぬと唱へ、議論と實行と或は各個人經濟上の事にも論及して居る。

全體の文章が卑近で、それに古人の名句、俚諺を盛んに引用し、古今東西雅俗混合の新文體は殊に一般の人心をひきつけたのであつた。

さて此時小石川に塾を開いて諭吉に對立して居つたのは同人社の中村敬宇である。敬宇は、桂川甫周の門に出て蘭學者で、また漢學にも造詣があつた。安政

二年昌平學校の教授方となり、慶應二年には幕命で英國に留學した。同人社は明治六年に開いたのである。

敬宇は諭吉と異り、西洋の精神的方面にのみ力を致して、西洋道德を鼓吹した人である。その著スマイルスの「自助論」(「西國立志編」)、ミルの「自由の理」は、今尙應々市中書店に見る所である。

又洋學者箕作麟祥は、箕作阮甫の子で敬宇に學んだ人である。麟祥は英學の外に佛學にも通じて居つて、後には開成所の教官となつた。其著述の有名なものには「勸善訓蒙」といふのがある、個人的の道德を唱へたもので、道德の基礎をも外國に求めやうとするに至つた筋道が明かである。

これより追々と洋學者の改革論も起つた。漢字廢止論は前島密によつて、慶應三年の時に提議せられ、次で西周によりてローマ字論も唱へられたのであつた。久米邦武氏が岩倉公の渡航の際隨行して作つた「回覽日記」を見ても當時洋學者の氣分を窺うことが出来るのである。



また此外、洋學に通じて新聞記者であつた福地源一郎や、成島柳北や、栗島鋤雲などいふ人々もあるが、要するに、其代表者としては福澤諭吉を挙げねばならなかつたのである。

## 第八章 結語

回顧するに、青木昆陽や、野呂元丈等に依つて始められた西洋學は、以上述べた様に、遂に今や日本に缺くべからざるものとなつたのである、其間實に一百七十餘年を経たのである。

徳川家康に依つて行はれた切支丹禁制は、三代將軍家光の時島原の亂の鎮定と共に所謂鎖國政策となつて現はれ、宗教に關係なき交通すらも禁ぜねばならぬ破目となつた。これもとより幕府の本意ではなかつたのであらう。而も其結果は何うであつたか。我國の智識の點に於ては全く閉鎖されて、寛永十二年に巨船安宅丸を建造してもそれを動かすことが出來ず、あはれ我造船術は鎌倉時

代の始めより、何等の進歩を見ないことを明かに證據立てた。しかし此政策は、幸ひにも國內思想の統一を齎した。

一方經濟界の方面を見ると秀吉以來の外國通商は、急從に我國經濟界を殷賑にして、山口、堺、兵庫などは貿易港として非常な發達を遂げんとした。而も幕府の政策はこれら都府の發達を中絶するの止むを得ない事態となつて、一代の智見新井白石が重商主義的政策を思つたのも其時代に應じたものである。兎に角我經濟界は國內自給の時代となつて經濟界も統一した。

此の様に思想界に於ても、經濟界に於ても、國內は統一せられたから、一方に於て我國は、割合に純日本的の文化の發達を來して、或は元祿時代となり、或は大御所時代となつて現はれたのである。幕末外交關係の喧しい時になつて國民の思想が比較的動搖しなかつたのは。一は此の統一の結果である。

この國民思想の動搖しないといふことは、他の一面に於て洋學者といふものがあつたからである。徳川時代の末頃の國民の一部の階級のものは、洋學者等

の爲めに、思ひ外進んだ西洋の智識を持つてゐたのである。幕府並に明治初年の政府の外交方針が大體に於て失策がなかつたのは、此等洋學者の功績に依る所は少くないのである。

今幕末にあつて内部國民の自覺が如何にして促がされつゝあつたかに就いて少し記して見やう。

前にも述べた様に全體寛永の鎖國が絶對的の鎖國でなくて、一部の人は間接ながらも世界の智識を得て居るし、殊に蘭書の禁が弛んでから、種々な洋學者が、海外の形勢を論じて書を著し國民の自覺を促がしつゝあつたのである。然るに今や、外國船の來航となつてから識者は愈々心を腦し茲に開國論ともなり、國防論ともなり攘夷論ともなつて現はれたので、其主張の外形は異つて居ても皆これ國民自覺の聲といはねばならぬ。

開國論は、實に蘭學者及其影響をうけた人に依つて主張せられたのである。

夫明年間は仙臺の人工藤周菴は「赤蝦夷風俗考」を著はして、露國の北海侵略

に備ふることの急務である事を述べて、我國は宜しく交通貿易を行つて露國の内情を知らぬばならぬ、蝦夷を開拓して貿易場とすれば長崎と競争して物價は安くなる隨つて日本は莫大の利益を得るのであると曰つて居る。

此思想が更らに發展して進取論が起つた。寛政の土生能五郎は、露西亞と貿易をして蝦夷樺太を開拓し、其間に諸大名を配置して置けば其武威が「カムサツカ」を壓して露西亞の日本侵略も策なきに至るであらう、若し露西亞が日本に屈服でもすれば、亞細亞、歐羅巴を併呑するのも困難でないといひ、本多利明は「西域物語」を著して蝦夷を開拓して貿易を行ひ滿洲一帯を經略し、また一方南洋諸島をも經略し、カムサツカを日本と命名してこゝに首府を置き、今の日本を古日本と稱すべしなど、云つて居る。前にも記した佐藤信淵の如きは、此時「宇内混同秘策」を著して、國家を保つ所以を述べて開國の必要を説きて居る。またシベリアの沿海州を侵略して露西亞の南下を挫き一方には南洋を併呑して支那と英國とに拮抗して宇内に國立を立て、更らに進んでは日本は「すめ

らみこ」の國で即ち國の根源である、世界萬國の根基である、だから日本がよく治まれば、世界の諸國は日本の分家となり外國の大統領、帝國も日本に臣服して宇内統一が出来るなど、極論して居る。勿論今日より見れば淺薄なる空論に過ぎないが、鎖國の夢に鎖された時代、而も幕府の最も腐敗した時に於て斯くの如く雄大なる説をなしてゐるのは偉とせねばならぬ。

土生能五郎や佐藤信淵のこの思想が一貫して幕末に至つたので、維新の大事業は、これらの論の効果が少くないのである。維新の際に努力した豪傑の多くのものがこの論の主義に依つて居るものが少くない。大槻磐水や橋本佐内の如きは日露同盟論を唱へ、左内は進んで南米を併せて「メキシコ」を日本領とすべしと曰つて居る、二十餘歳にしてこの論もなすはもとより天品に依るのであるが、また佐藤信淵等の思想の影響であらう。

吉田松陰、眞木和泉、山田方谷、平野國臣もまた滿韓經營論をなし、明治初年の征韓論や、日清戦役、近くは日露戦役や、韓國併合の如き事件もこの氣運

の進んだものである。

國防論も自衛上早くから起つて居る。伊藤仁齋の門から出た並河天民は、蝦夷を開拓して、滿洲に入るべしと論じてゐる、これ蝦夷防禦の見地から云つたもので國防論である。中にも注意せられたのは、「海國兵談」、「三國通覽」の著者林子平であつた。これから國防論も盛んになつて蘭學者を第一として、兵學者や漢學者もこれを論じ、幕府の政治家も注目する様になつた。其論の歸着點は沿海の防禦を嚴にして、蝦夷を開拓し兵器軍艦の改造をせねばならぬといふのである。

次に起つたのは讓夷論で、國體論と、經濟論と、歐米侵略に對する防禦から來た論の合したものである。國體論は大體儒學者と國學者とに依つて唱へられたので、元々幕府が朱子學を以て官學としたので、朱子學派は一般の思想を支配し、王朝の辨、華夷の別、大義名分を論じて盛んに國體論を鼓吹した。併しあまり極端に支那崇拜であつたので、一方に國學が起つた。これは支那崇拜

を破つて、支那を夷狄視し、我日本を無缺の國といふので儒者とは犬猿の間であるが國體を擁護するといふ點に於て一致するのである。歐人を排斥すること極端で、彼等禽獸に等しきものと對當に交際するのは我國の耻辱であると、開國論には極端に反對を唱へた。

次の經濟論者は、從來の蘭貿易が徒らに我が國の金銀銅を多額に流出せしめたので、惡貨幣のみ多くなつたと、開國論に反對してゐる。元來戰國以來葡萄牙や、西班牙が貿易と宗教とを兩手にさげて、殖民政策をやつて、日本國家を顛覆しやうとした事は、朝野の人の頭に入つて居ること、西洋人の侵略主義に反對するのは當然で、宜敷拒絶して國內の安寧を保つべしといふのは普通の考へて、歐洲諸國の東洋政策の實際を見聞し、彼等の國の形勢を知るだけ、露英も葡萄牙や西班牙と異らないと思ふのは當然の事で、また國民自覺の發露といはねばならぬ。かくて讓夷論は寛政頃より漸く盛んとなつたのである。

西班牙や、英國の長崎に於ける、露西亞の北方に於ける暴行があつて、文政

の打拂令が出るといふまでになつた。文化四年には平山幸藏が露領侵略論を唱へ、十三年には蒲生君平が日露開戦論を唱へた、然しこれらの人々は、地位が底いので所謂草莽の論に過ぎなかつたが、これら人々の牛耳を握つて人心を導いた、大立物は實に水戸の徳川齊昭即ち烈公であつた。

水戸藩は初めから、一種の學問主義で、其藩の人々は外人が通商の名目のもとに、我が國情を探偵し、機會があると兵力で奪略する積りで、兵力がもし不可能であると見れば、耶蘇教の力で人心を迷はして、徐々に侵略を行ふとするのであると思ひ、通商や、宗教が最も憂うべきものと信じて居つたのである。こゝから、勢ひ貿易は禁ずべし、宗教は許すべからずと云ふのであつた。これらの考は日本過去の歴史を知れば尤もな説で、齊昭は弘道館記を著はして尊王攘夷を唱へ、更らに大船製造の禁と、貿易禁止を幕府に建議した。しかし幕府はこの論を容れないで十三年には文政の打拂令を止めて、薪水を供給すると曰ふ緩和論になつたので齊昭は憤慨して屢々打拂令を出さんことを求めた。

當時烈公の勢力といへば偉大なもので、其名は全國に廣がり、如何な人でも齊昭を賞讃せない人は無く、随つて其一言一行は天下に影響し、加ふにこれを助くるに藤田東湖等の人々があつたので天下氣節の士といへば皆水戸を謳歌し、天下を風靡するといふ有様であつた。また水戸の藤田幽谷の如き人は、犬猿の間柄の國學と漢學とを折衷して、國粹主義を唱へた。

水戸に斯の様な論の出たのも、畢竟時勢の生む所で國民自覺の聲とでもいひ得るのである。全體水戸は敵本主義で、兎に角一度外國と戦ひ、三百年間眠れる國民を醒まし、人心を一新せねばならぬ、それで攘夷を行つて人心を刺戟せねばならぬと云ふので、常陸に外國船が來た時、藤田東湖は外國船に乗つて外國にさへ行かんとした位であるから、もともと攘夷を目的としたのでなくて、これに依つて國內の人心の腐敗を一新せんとするので、水戸の人々や一般有識者の論もこれである。

斯く人心のともすれば動搖せんとしてゐる時に、世界の智識を有して、新智

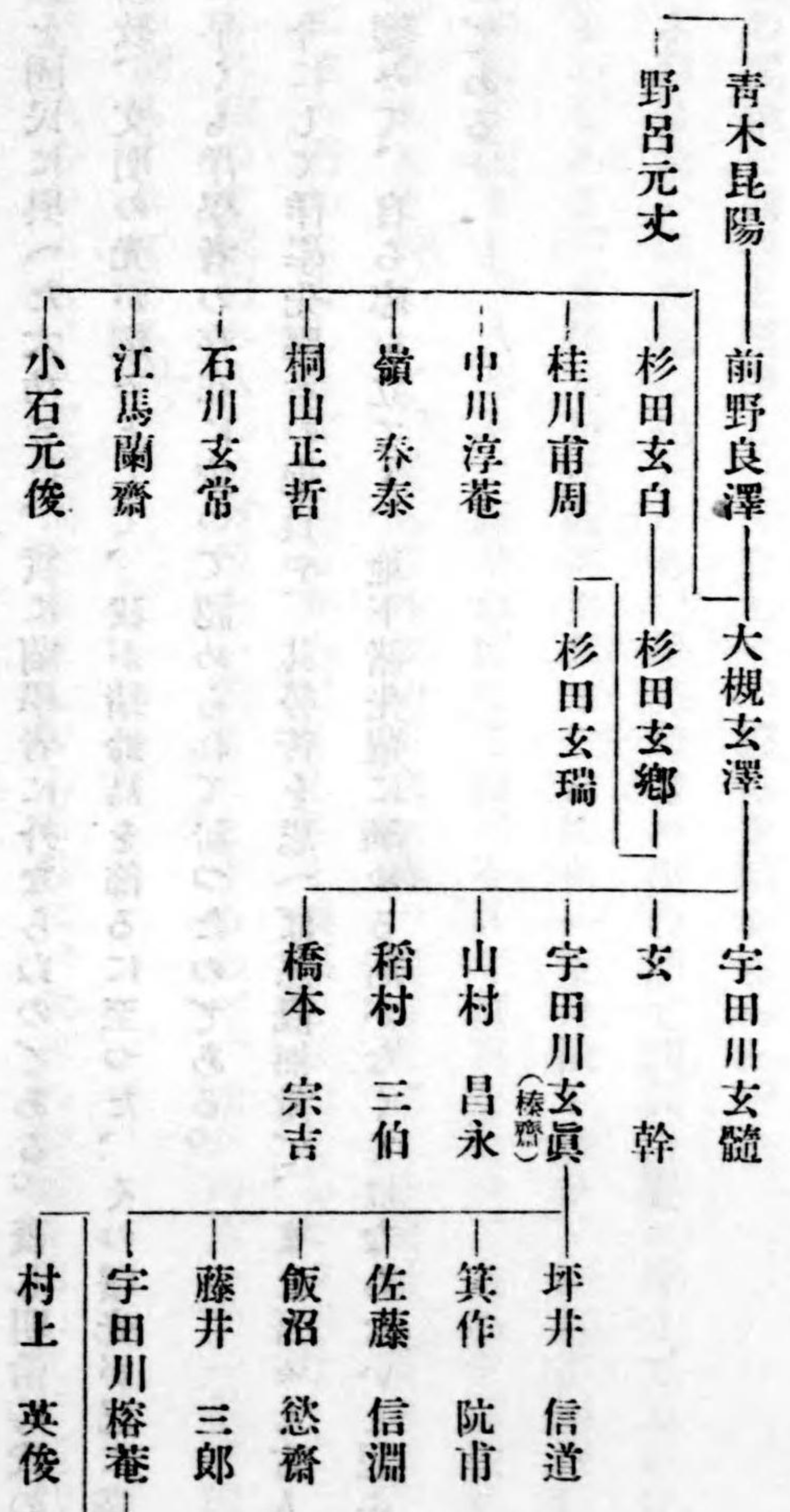
識を國民に與へた大功者は、實に蘭學者に外ならぬのである。蓋し明治時代の新政、文明の光が耀々として、我が蜻蛉島を飾るに至つた、その曙光が已に業に早くも洋學者の存在に依つて認められて居つたのである。

今にして洋學先驅者の抱負や、其勞苦を思へば感慨無量で、また吾々も古人に鑒みて、自ら志を立て、地下諸先輩に酬ゆる所がなくてはならないと思ふのである。

# 附 録 (第一)

蘭學略系統

(一)



# 欠

# 欠

Mautern 外套	elock	mantel	(葡)
Meriy/su-tabi 莫小大足袋	stockings	manias	(葡)
Meriyus 莫大小	hence all textile fabrics of the same sort	metias	(西)
Dontak	sunday, holiday	zou dag	(西)
Handon	saturday, a half holiday	"	(西)

(本表は凡て、The influence of early intercourse with Europe on the Japanese language, by Prof. N. Murakami. に依る)

( 32 )

# 新文の源流

大正三年九月十八日發行

(定價金拾錢)  
(郵税金貳錢)

著者 魚澄總五郎

發行者 赤城正藏

東京市麹町區三番町五〇

印刷所 中田福三郎

東京市足立區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 秀英舎第一工場

東京市足立區市谷加賀町一丁目十二番地

第六十一編  
新文の源流



發賣

一元

東京市麹町區三番町五〇  
電話番町二二八〇番  
振替口座東京一〇四三二

## 赤城正藏

全國各書林



ムラクレ

書叢ギカア

の本日

色特

簡潔

平明

○紳士の標準智識○

1. 古今東西の科學藝文中 紳士の標準智識たるべきものを聚取し解説せり

2. 従前の刊行物の高價、尨大、難澁なるが爲めに當然辨知し置くべき著述なるにも關せず止むを得ず閑却せられたるもの多きを汲ひ専ら廉價、平易、簡明に解説し刊行せり

3. 内外の傑作の紹介は簡單にコンデンスしたりと雖妙味に到つては毫も減殺する所なし

◀也錢拾金 僅に 册各▶

アカギ叢書

毎月數篇 逐次刊行 (定價金拾錢 郵稅各貳錢)

- 第一編 歐洲文藝 村上 靜人 原作 編輯 ▲ 人形の家 (ノラ名)
- 第二編 哲學叢話 中島 文學士 編 ▲ プラダグマチズム
- 第三編 歐洲文藝 日野 月文 學士 編 ▲ 廢都
- 第四編 社會學叢 葛西 文 學士 譯 ▲ 群衆心理 (上卷)
- 第五編 歐洲文藝 原 博士 作 ▲ 痴人
- 第六編 歐洲文藝 村上 靜人 著 ▲ キウニトト 其著作
- 第七編 哲學叢話 三浦 文學士 篇 ▲ ベルグソンの哲學

○第八編	歐洲文藝	オスカア・ウワイルド	村上 静人 譯	▲	サ	ロ	メ								
○第九編	哲學叢話	中島文學士編	▲	オ	イ	ケン	の	哲	學						
○第十編	博物叢話	寺尾理學士編	▲	イ	ダ	ン	の	ウ	進	化	論				
○第十一編	日本史談	龍居文學士著	▲	文	政	化	江	戸	の	世	態				
○第十二編	歐洲文藝	フライダツハ	齊藤文學士編	▲	劇	喜	新	聞	記	者					
○第十三編	歐洲文藝	スチヴンソン	齊藤文學士編	▲	壺	の	鬼	活							
○第十四編	歐洲文藝	トルストイ	村上 静人 編	▲	復	活									
○第十五編	歐洲文藝	(絶版發賣禁止)	▲	レ	デ	イ	ー	ス	マ	ン	(一	ラ、	ミ	一	名)
○第十六編	美術叢話	佐々木文學士著	▲	奈	良	の	美	術							

○第十七編	歐洲文藝	モーパッサン	村上 静人 編	▲	女	の	一	生					
○第十八編	歐洲文藝	メーテルリンク	村上 静人 編	▲	モ	ン	ナ、	ヴ	ァ	ン	ナ		
○第十九編	日本史談	龍居文學士著	▲	日	本	建	築	史	要				
○第二十編	社會學叢話	ルビボン	葛西又次郎 譯	▲	群	衆	心	理	(下	卷)			
○第二十一編	美術叢話	桑山文學士編	▲	支	那	の	美	術					
○第二十二編	歐洲文藝	板垣文學士編	▲	ワ	ン	ダ	ー、	ブ	ツ	ク			
○第二十三編	歐洲文藝	ストリンドベルヒ	村上 静人 編	▲	父								
○第二十四編	歐洲文藝	沙村 静翁	村上 静人 編	▲	ハ	ム	レ	ツ	ト				
○第二十五編	歐洲文藝	ダマシチオ	日野月文學士編	▲	全	譯	ジ	ヨ	バ	ン	ニ	(上	卷)

○第廿六編	文藝洲	全	歐洲	全	譯全	ジヨバンニ	(下卷)
○第廿七編	文藝洲	村上 静人	歐洲	村上 静人	神	曲	
○第廿八編	史談	龍居 文學士	日本	龍居 文學士	鎌倉の史話	話	
○第廿九編	文藝洲	板垣 文學士	歐洲	板垣 文學士	ユ	デ	ト
○第卅編	文藝洲	ピエトロ・コッサ	歐洲	ピエトロ・コッサ	皇	帝	ネ
○第卅一編	禮節	獨逸大使館員	禮節	獨逸大使館員	歐洲	禮節	節
○第卅二編	文藝洲	村上 静人	歐洲	村上 静人	海	の	夫
○第卅三編	宗教	東北大學 講師	宗教	東北大學 講師	ケ	オ	イ
○第卅四編	地理	マルコポーロ	地理	マルコポーロ	東方	見	聞
		佐野 文學士		佐野 文學士	錄		

○第卅五編	文藝洲	葛西 文學士	歐洲	葛西 文學士	ド	ス	ト	イ	エ	フ	ス	キ	イ	論	附	モ	ウ	バ	ツ	サ
○第卅六編	文藝洲	島田 青峯	歐洲	島田 青峯	絆															
○第卅七編	文藝洲	村上 静人	歐洲	村上 静人	暗	の														
○第卅八編	文藝洲	島田 青峯	歐洲	島田 青峯	武	器	と	人	(チヨコレ)											
○第卅九編	文藝洲	村上 静人	歐洲	村上 静人	鴨															
○第四十編	歴史	小林 愛雄	歴史	小林 愛雄	神	話	と	傳	説											
○第四十一編	文學	ズーデルマン	文學	ズーデルマン	マ	グ	ダ		(故郷)											
○第四十二編	文藝洲	ドストイエフスキ	文藝洲	ドストイエフスキ	虐	げ	ら	れ	し	人	々	(上卷)								
○第四十三編	文藝洲	栗原 文學士	文藝洲	栗原 文學士	初							戀								

○第四十四編	演藝叢談	小林愛雄	著	西洋演劇史
○第四十五編	歐洲文藝	フロオベル	原作	サランボー
○第四十六編	音樂叢話	小山文學士	著	日本淨瑠璃史
○第四十七編	歐洲文藝	モーパッサン	原作	ピエール・と・ジアン
○第四十八編	歐洲文藝	ダヌンチオ	原作	死の勝利
○第四十九編	歐洲文藝	シエンキウイツチ	編	何處へ行
○第五十編	歐洲文藝	ドストイエフスキ	編	罪と罰
○第五十一編	歐洲文藝	ドオデ	編	サフオ
○第五十二編	歐洲文藝	ドストイエフスキ	原作	虐げられし人々
		加藤朝鳥	編	(下巻)

○第五十三編	歐洲文藝	ハウプトマン	原作	日の出前
○第五十四編	歐洲文藝	ホフマンスタール	原作	エレクタラ
○第五十五編	歐洲文藝	ゲイテ	原作	ヘルマンとドロテア
○第五十六編	歐洲文藝	イブセン	原作	幽霊
○第五十七編	歐洲文藝	ゾラ	原作	女優
○第五十八編	歐洲文藝	ヘツベル	原作	マリア、マグダレーネ
○第五十九編	歐洲文藝	シヨウ	原作	ウォーレン夫人の職業
○第六十編	歐洲文藝	ツロオベル	原作	マダム・ボバリ
○第六十一編	日本史談	文學士魚澄	五郎著	新文明の源流
				(日本洋學の發達)

279  
1028

○第六十二編 美術叢話 文學士 佐々木青葉村著 ▲日本の彫刻

○第六十三編 西洋史談 文學士 齋藤茂編 ▲シリーザー傳

○第六十四編 歐洲文藝 イエーッ原 栗原古城譯 ▲幻の海 附イエーッ詳傳

○第六十五編 歐洲文藝 山本有三編 ▲名譽

○第六十六編 社會叢話 東北大學講師 佐藤正著 ▲近世社會運動

○第六十七編 國文叢話 文學士 小山龍之輔編 ▲源氏物語 (上卷)

○第六十八編 歐洲文藝 トルストイ原作 板垣文學士編 ▲アーンナ、カレニア

○第六十九編 國文叢話 文學士 小山龍之輔編 ▲源氏物語 (下卷)

● 頒布部數數十萬を越へたる 赤城叢書既刊目錄 ●

終

